

# 「食べものがたり」がつくる国語教育 ——高校国語で文学を味わうために

法政大学中学高等学校

林 圭介

他 1 名

## はじめに

食の視点から読む文学教育とは何か。本研究では、この問いをさまざまな角度から考える。その理由は二つある。

一つは、コロナ禍において生じた他者との関係や社会の変容について再考するためである。食は日常の生活に欠かすことができない。一方、文学は生活と一見関わりの薄い芸術とみなされている。しかし、食は他者との接触が禁じられたコロナ禍において日常であり続けたが、他者との関係を大きく変化させている。たとえば、職場や食堂での間仕切りや顔を覆うマスクは、コロナ後も消えていない。この他者との関係の変化を再考するために、文学に描かれた食を題材として社会の変容の意味を明らかにしたい。

もう一つは、高校国語における文学教育をめぐる方法論を提起するためである。学習指導要領の改訂によって言語の 4 技能が学習領域となった。その結果、教室で扱う教材が文学から実用文・評論・古典へと変わりつつある。問題は、文学を現実の社会と関わらせてこなかった教育現場にある。そこで、文学を読む意味そのものをあらためて考えたいのである。食という観点から文学を社会と関係づける教育活動は、国語教育に新たな方法論を打ち立てるにちがいない。

本研究の目的は、次の三つである。まず 1) 文学を実社会と関係づける方法論を探究することである。実社会における文学の意義を浮かび上がらせ、食を描く文学を扱う国語教育の方法とその具体的実践を提起したい。また 2) 国語教育における「たべものがたり」を位置づけることを挙げる。食をめぐる物語を「食べものがたり」として、食を描く文学を味わうために、他者との関係や社会の仕組みに学習者が目を向ける機会をつくる。さらに 3) 「総合的な探究の時間」(以下、「探究」と略) に応用できる教育活動を具体化することである。「食べものがたり」は、国語教育だけでなく他教科と協働する活動を可能にする。この食を描く物語を取り入れた授業を、通常授業、選択授業、特別講座、探究のそれぞれで提案したい。

研究の方法としては、これまでに日本私学教育研究所委託研究員として「食から見つめる国語教育」(令和 3 年度) に取り組んできた経験を活かし、共同研究での議論と個人および協働授業の実践を比較して考察することを挙げる。先の研究課題では食を描く定番教材の読解を通じて他者との関係を可視化する食の役割を明らかにしたが、本研究では「食べ

ものがたり」を取り入れた国語教育とその応用の仕方を提起する。

本研究課題では、共同研究者の宮沢真希子氏（法政中高教諭、化学・調理実習）に加え、木村朗子氏（津田塾大学教授、古典文学）、白川理恵氏（ヒューロン大学講師、カナダ交流）、張日榮氏（徳成女子高校教諭、韓国交流）、平野芳信氏（山口大学名誉教授、近代文学）を研究協力者に迎え、「食べものがたり」の文学教育」共同研究会を結成し、食を文学と実社会の交点に位置づけ、食から考える文学教育を検討した。

共同研究会では、授業実践の事前準備（8月）と振り返り（1月）、読書会（10月）、講演会（10・11月）を行った。またこの共同研究での討議をもとに、「食べものがたり」の文学教育（11・12月）を具体化し、他の教育機関にも貢献する活動として次の6つを掲げた。

- 1) 日本の近現代文学に描かれた食の史的展開を把握するために、明治期から令和期まで5つの時期に分けて食から文学を読みなおすこと
- 2) 現代文と古典を組み合わせた教育方法を提起するために、高校国語で扱われる古典作品を食から読みなおすこと
- 3) 「食べものがたり」の文学教育を系統立てるために、高校国語における定番教材を食から読みなおすこと
- 4) 「食べものがたり」の文学教育におけるデジタルフォーメーションの方法を提起するために、さまざまなメディアに描かれた食と文学を関連づけること
- 5) 「食べものがたり」の文学教育を日常の生活や現実の社会と関連づけるために、文学に描かれた食をレシピとして料理すること
- 6) 「食べものがたり」の文学教育を日本と海外との相互交流の場として理解するために、食をテーマにした討議と文学のリライトを通じた韓国の高校生およびカナダの大学生との交流活動を展開すること

本稿では、主に1)、4)、5)に焦点を当て、研究成果を「〈食べものがたり〉における私と社会」、「〈食べものがたり〉における食べること」、「〈食べものがたり〉でつくる文学教育」としてまとめる。また「おわりに」で、2)と6)の活動に触れながら、3)の展望を明らかにし、今後の研究の方向性を示したい。

食の視点から読む文学教育をつくることは、コロナ禍において脆弱化しつつある共同体を再構築する具体的な手立てとなる、また新学習指導要領の施行に伴って、国語で文学教材が教えられなくなりつつある読むことをめぐる問題について再考を促す機会にもなる。食を通じて人々が連帯する具体的なあり方と言葉で人びとが関わり合う教育の接点を生み出すからだ。食の視点から文学を読む授業づくりは、文学と現実および社会とのつながりをつくる。人は文学に描かれた食を味わうことができるか。本研究から「食べものがたり」を教えることの意義を問うてみたい。

## 1 〈食べものがたり〉における私と社会

### 1-1 〈食べものがたり〉としての文学

「食べものがたり」という言葉を用いたのは、歴史地理学者の湯澤規子である。湯澤は「「食べもの」や「食べること」、あるいは「食べられなかったこと」には、人生の数だけ、その人にしか語ることでできない、数多の物語がある」として、「日常の生活世界の物語の数々」を「食べものがたり」と呼んだ<sup>1</sup>。

また歴史学者の藤原辰史は、「調理と共食という二つの、いわば「食の付加価値」があるがゆえに、食は人間を人間であらしめる」と言う。実際に体内に摂取する栄養だけでなく、「食」の付加価値が動物を「人間」に変えるというわけだ。「食を軸にすえた人間集団の構築」あるいは「食を基盤にした意識的な人びとの連帯」を現代の社会課題として提起したのである<sup>2</sup>。

さらに日本研究者の青山友子は、日本文学研究における食の位置づけを次のようにまとめている。

Despite this abundance, and despite its diversity, the theme of food in Japanese literature has been neglected for decades, primarily because food and eating have only recently begun to attract serious academic attention... This historical neglect is based on disgust, on a fear of food and eating, on a view that they are banal, feminine, embodied, impure, unclean, and uncivilized. The perception of food as a “feminine” concern is also noted by a number of scholars.” [これほど豊かで多様であるにもかかわらず、日本文学における食というテーマが、長い間、見過ごされてきたもっとも大きな理由は、食や食べることが最近になってやっと学問の領域で真剣に議論されるようになってきたからだ。(中略) この食と食べることが学問において歴史的に軽視されてきたのは、嫌悪感あるいは食と食べることへの恐怖、これらが日常的で女性的、形あるものにして不純、不潔、未開だという見方に基づいている。食が「女性的」な関心事だという認識もまた、数多くの研究者によって指摘されている。]<sup>3</sup>

青山によれば、文学研究において食が軽視されてきたのは、食が平凡で女性的、また抽象的なものではなく形ある具体的なものであるがゆえに、不純で不潔、そして未開なものに見なされてきたからである。教育の現場だけでなく研究の世界においても、食と文学は遠ざけられてきた。

<sup>1</sup> 湯澤規子『食べものがたりのすすめ 「食」から広がるワークショップ入門』農文協、2022年、pp.19-20。

<sup>2</sup> 池上甲一、岩崎正弥、原山浩介、藤原辰史『食の共同体 動員から連帯へ』ナカニシヤ出版、2008年、p.5。

<sup>3</sup> Aoyama, Tomoko. *Reading Food in Modern Japanese Literature*. University of Hawaii Press. 2008, p.7. [ ]内の翻訳は、引用者による。以下同様。

本稿では、湯澤の用語、藤原と青山の問題意識を共有しながら、食を描く文学を三角鉤括弧で表す〈食べものがたり〉として、食と文学から現実の社会をつくる国語教育そして他教科との連携を図る探究の授業の具体化を試みたい。

## 1-2 胃袋と食べもの

先の湯澤は、その名もずばりの『食べものがたりのすすめ 「食」から広がるワークショップ入門』で、「食べること」に対するさまざまな教育活動を提起している。その一つに、「あなたにとって胃袋とはなんですか？」という問いがある。この問いに参加者が答えていくのだが、問いには仕掛けが施されている。ホワイトボードに胃袋の絵を大きく描き、その真ん中に線を引き、上下にそれぞれ「私」「社会」と分けることで、胃袋の社会的意味を問うようにしているのである。胃袋は「私」のものか「社会」のものか、というわけだ。湯澤も指摘するように、この活動を実際に授業で行ってみると、「世代を問わず、圧倒的に、胃袋は「私」のものだと考えている人が多いことがわか」という<sup>4</sup>。

そこで、次に「あなたは「食べもの」から何を得ていますか？」という問いを立て、先ほどの胃袋の絵に、新たに「物質」と「文化」という二つの軸を左右に加える。すると、「「食べものは単なる栄養を摂る物質に過ぎない」と思う人が多くなっている」というのは思い込みで、実際には食が「栄養や物質に限らず、文化的で社会的な世界にも豊かに展開している」ことに気づく<sup>5</sup>。

たとえば、本務校の授業で行った回答には、「思い出」と挙げた学習者がいた。「食べもの」が家族や友人と言葉を交わす場の中心にあり、食について話し合えばいつでもその時に戻ることができるというのだ。湯澤の示す胃袋をめぐる問いを皮切りに、食が「私」から「社会」へ、また「物質」から「文化」へと広がっていくことをリアルな体験として実感するために、次に食を描く文学である〈食べものがたり〉の教え方を考えたい。

## 1-3 『パン屋襲撃』における食べること

最初の授業で取り上げたのは、村上春樹『パン屋襲撃』（1981年）と韓国の映画『アコースティック』（2010年）である。『パン屋襲撃』は、空腹でパン屋を襲いに行った「僕」と相棒が、パン屋の主人の提案で主人が趣味にするワグナーの音楽を聴くことと引き換えに、二人が存分にパンを食べるという物語である。村上の短編は、空腹のためにパン屋を襲撃したはずの二人がパン屋の主人に丸め込まれてしまう、いわばパン屋襲撃の失敗談なのだ。

実は、この村上の短編には続きがある。『パン屋再襲撃』（1985年）である。この続編は空腹で10年前のパン屋襲撃を思い出した主人公の「僕」が、妻から提案されてパン屋の主人にかけられた呪いを解くために、パン屋再襲撃を思いつく。しかし、深夜で開いている

---

<sup>4</sup> 前掲注1、p.25。

<sup>5</sup> 前掲注1、p.31。

パン屋がなかったために代わりにマクドナルドを襲ってビッグマックを食べる二人の姿を描いている。10年前と異なり襲撃に成功したものの、襲撃した先にパン屋はなく主人もいない。10年前の「僕」は相棒と手を組んでパン屋襲撃に失敗したが、パンを食べることができた。しかし、その10年後、「僕」は妻と一緒にマクドナルドの襲撃に成功したが、食べたのは手作りのパンではなく大量生産のマックだったというわけだ。

高橋丁未子が指摘したように、「Q-Quality（品質）・S-Service（サービス）・C-Cleanliness（清潔さ）」を示す「具体的な商品が「マクドナルド・ハンバーガー」であり、「十分以上過ぎたものは、非商品で「ウチとは何の関係もありません」ということだ」という<sup>6</sup>。この時間を過ぎた「非商品」としてのビッグマックを食べるのが「僕」と妻なのだ。

村上は空腹からパン屋を襲う「僕」の物語を二度にわたって創作し、くり返し食べることをめぐる物語について書いた。何を食べるのか、誰と食べるのかをテーマとして自作の意味をさまざまな角度から読者に問うたのである<sup>7</sup>。

#### 1-4 『アコースティック』における音楽

韓国の映画『アコースティック』は、この村上の『パン屋襲撃』をもとにしている。村上文学と映画アダプテーションの関係を論じた藤城孝輔は、映画『アコースティック』において村上の短編が下敷きにされ、いかに村上文学が他の文化圏で流用されているのかを検討している。本稿では、藤城の説明を参照しつつ、村上文学と映画において食がいかに関わるかを考察する。食を描く文学をいかに味わうことができるかを考えたいのである。

『アコースティック』は、三話からなる。第一話はラーメンを食べ続けないと死ぬという奇妙な病に冒されたシンガーソングライター、第二話は韓国の男性バンド CNBLUE の二人が演じる売れないミュージシャン、第三話は音楽を使った武器開発を行う未来の研究者の姿を描いている。三つの物語は、音楽で結びついている。

不治の病に冒されたシンガーソングライターの主人公は、病院を抜け出し自分の歌を世の中に伝えようとするものの、人々の心になかなか伝わらないともがく。一方、彼女の知人が訪れたライブハウスで演奏するロックバンドの二人は、客から受け入れられずライブハウスを追い出されてしまう。挙げ句の果てに、空腹で路頭に迷った二人はギターを売りに出すことに決める。しかし、その途中で立ち寄ったパン屋でギターを忘れてしまうのである。30年後、音が武器になり音楽が消えてしまった未来で、音の研究をしている大学生が、少女の手にする iPhone を通じて音楽という世界があったと知る。このように、映画『アコースティック』は音楽でゆるやかに結びついている。

<sup>6</sup> 高橋丁未子『羊のレストラン』講談社、1996年、p.144。なお、傍点は原文のママ。以下同様。

<sup>7</sup> パン屋を襲う「僕」の物語が、続きの創作の他に、映画やマンガといった他ジャンルに置き換えられていくアダプテーション、ドイツ語への翻訳を経て新たに書き換えられた合作といった、村上文学におけるトランスメディアのありようについては、拙稿「おいしい文学が食べられますように——村上春樹『パン屋を襲う』をめぐって——」（『日本文学』第72巻第4号、2023年）を参照されたい。

『パン屋襲撃』を下敷きにしているのは、第二話である。二人のミュージシャンは、実は、兄弟という設定である。この設定は、アイドルグループである CNBLUE の設定と重なっており、村上の原作における主人公の青年と相棒とは異なっている。映画『アコースティック』は、原作に忠実というよりも、主役を演じる CNBLUE に忠実なのである。

物語もまた、村上の原作よりもアイドルの設定に近づけて変更されている。というのも、村上の原作では、パン屋を襲撃した二人に対してパン屋の主人が好みのクラシック音楽を聴くことを二人に申し出たことによって襲撃は叶えられなかったものの、二人がパンを手に入れるという奇妙な結末に至る。一方、韓国映画では、パン屋でギターを置き忘れた弟と兄が二人でパン屋の主人に詰め寄ったところ、主人がギターを持ち去ったことが判明するが、その主人がかつて音楽を志していた過去を知り、ギターを取り返した二人がふたたび音楽に目覚めるという物語であるからだ。

藤城は、村上の小説と韓国の映画を比べて、「CNBLUE という新しいスターの乗り物として機能するために、「パン屋襲撃」は大幅な改変を経ることになった。ミュージシャンという設定にはじまり、主人公たちの性格、兄弟という間柄、パン屋の主人との取り引きの内容といった変更点はいずれもイ・ジョンヒョンとカン・ミンヒョクのスターとしてのイメージを確立する役割をになう。この反面、アイドル表象を阻害することのないわかりやすい物語に作りかえられたことで、村上の小説が本来もっていた曖昧性は失われた」として「本作が描き出す「パン屋襲撃」はグローバルなポピュラー文化の中において村上作品がもっている一面を体現している」と論じる<sup>8</sup>。

映画『アコースティック』は、村上の短編を流用した、アイドルグループ CNBLUE の物語なのである。しかしこの映画の主題である音楽から食べものに目を移したとき、小説と映画の関係は異なる様相を帯びてくる。村上の短編における食べるものの意味が浮かび上がってくるのである。

### 1-5 小説と映画における食べること

『アコースティック』では、ギターを売りに行った弟が兄からもらった電車賃でパンを食べてしまう。その後、ギターを取り返しにきた二人にパン屋の主人は、パンを振る舞う。つまり、パンは二度にわたって食べられている。一度目は電車賃を払って、二度目はギターを持ち去った代わりに無償で。兄と弟の二人はパンを食べることを通じて、パン屋の主人の音楽にかける思いを受け取るようになるのだ。食べるものとしてのパンは、金銭で得られるものから金銭ではなく心を通わせる触媒へと変化しているのである。

一方、『パン屋襲撃』で食べるものは、物語の終盤で食べるパンを除けば、「水」と「ひまわりの葉っぱ」である。「ひまわりの葉っぱ」は、通常、食べることができないが、戦時

---

<sup>8</sup> 藤城孝輔『村上シネマ——村上春樹と映画アダプテーション』森話社、2024年12月、p.297。

下ではレシピとして食卓に提供されることがあった。斎藤美奈子が言うように、「戦争末期の野菜の食べ方、それはずばり「生で食べる」」ことである。婦人雑誌に載った野菜の調理法を紹介しながら、食糧が欠乏する戦争下にあっては何かかもが食べることに向けられていたのである<sup>9</sup>。食に着目することで見えてくるのは、戦時下を想起させる飢えた貧しい若者と富める裕福な年長者の食べるパンの強奪を目指す姿が重なることである。

1980年代にあって戦時下の若者と戦後の状況を重ね合わせる村上の短編と、2000年代のアイドルグループがパン=心の交流を通じて音楽を再び志す姿を描く韓国の映画。音楽とともに食で結びつく二つの物語には、個人の私的な空腹が栄養という物質で満たされるばかりでなく、個人が社会と向き合う状況を作り出し、また異なる文化によって物語の意味を違える様を描き出している。その意味で、食を描く物語には、社会と文化へと開かれた個を越えたつながりを読むことができる。

文学と映画から食をめぐる物語の表現を比べることで浮かび上がるのは、社会の仕組みやその社会が抱える問題である。この社会システムと課題に目を向ける装置としての文学についてさらに深く掘り下げて考えるために、次に異なるジャンルの文学を比較しよう。

## 2 〈食べものがたり〉における食べること

### 2-1 同じジャンルと異なるジャンルの読み比べ

1-1では、食と物語の関係を考えるために、パン屋を襲うという同一のストーリーを異なるメディアで表現する文学と映画の違いを分析した。この分析から明らかになったのは、テキストが置かれた時代や社会の状況によって表現が異なることである。言い換えれば、この表現の異なりがそれぞれの時代や社会の状況を浮き彫りにするということである。

同一のストーリーを異なるメディアで描くアダプテーション研究の手法を援用して、次の授業では同じジャンルの小説テキスト、異なるジャンルの文学テキストを比べるという方法を通じて、〈食べものがたり〉で言葉を食べることは何を意味するのか、について考えた。授業で〈食べものがたり〉を読む、比べるとして用いたのは、次のテキストである。

#### 【〈食べものがたり〉を読む】

村上春樹『騎士団長殺し』(2017年)

小川糸『ポルクの晩餐』(2011年)

#### 【〈食べものがたり〉を比べる】

多和田葉子「Hamlet No See」(2019年)

宮沢賢治『フランドン農学校の豚』(1934年)

---

<sup>9</sup> 斎藤美奈子『戦下のレシピ——太平洋戦争下の食を知る』岩波書店、2015年、p.130。

## 2-2 〈食べものがたり〉としての『騎士団長殺し』

〈食べものがたり〉を読むことから始めよう。村上春樹『騎士団長殺し』のあらすじは、次の通りである。主人公は36歳の「職業的肖像画家」である「私」で、ある日、妻のユズから別れを告げられる。「私」は友人雨田政彦の手助けで、高名な日本画家である父の具彦が住んでいた小田原の家で新たな生活を始める。その家の屋根裏で「騎士団長殺し」と書かれた謎の絵を見つけ、谷の向こうに住む謎の隣人免色渉から肖像画を依頼される。9ヶ月に及ぶ「私」の旅は、別れた妻と再び結婚生活をやり直すことに向かう。小説が描くのは、絵と隣人という二つの謎に導かれて、「私」が妻との再出発を決意する姿である。

しかし、本稿で着目するのは「私」の描く料理の絵である。「私」が謎の人物である免色の家に招かれて供された食事の様子をガールフレンドに語る次の場面である。

私はやってきたガールフレンドに、免色の家での夕食会のことを話した。(中略)

彼女は熱心なスポーツ・ファンが、鬣屑チームの昨日の試合の得点経過を事細かに知りたがるように、食卓に供された食事の詳細を知りたがった。私は思い出せるかぎり正確に、前菜からデザートまで、ワインからコーヒーまで、内容を逐一丹念に描写した。食器も含めて。私はもともとそういう視覚的な記憶力に恵まれている。どんなものでもいったん集中して視野に収めれば、ある程度時間が経過しても、細かいところまでかなり詳しく具体的に思い出せる。だから目の前にある物体を手早くスケッチするように、ひとつひとつの料理の特徴を絵画的に再現することができた。彼女はうっとりとした目つきで、そんな描写に耳を傾けていた。ときどき実際に唾を飲み込んでいるようだった。

10

「私」は「視覚的な記憶力」を頼りに、ガールフレンドに免色の家での夕食会について詳しく話してみせる。小説で語られるのは、「前菜からデザートまで、ワインからコーヒーまで」、そして「食器」を含めた描写といった内容である。つまり、彼女に語った夕食会の食事の詳細については語られていない。ただ「私」が「料理の特徴を絵画的に再現すること」ができたことが語られているのである。

## 2-3 料理を「再現」する意味

だから重要になるのは、「私」が「スケッチ」を描くように語った料理の「再現」が何を意味するのか、である。「私」が語る料理に対して、彼女は次のように訊ねている。

「素敵ね」と彼女は夢見るように言った。「私も一度でいいから、どこかでそういう立

---

<sup>10</sup> 村上春樹『騎士団長殺し 第1部 顕れるアイデア編』新潮社、2017年、pp. 435-456。下線部は、引用者による。以下同様。

派な料理をご馳走されたいな」

「でも正直いうと、出された料理の味はほとんど覚えていないんだ」と私は言った。

「料理の味のことはあまり覚えていない？ でもおいしかったんでしょう？」

「おいしかったよ。とっってもおいしかった。そういう記憶はある。でもそれがどんな味だったかは思い出せないし、言葉で具体的に説明することもできない」

「姿かたちはそれだけありありと覚えていながら？」

「うん、絵描きだから、料理の姿かたちをそのまま再現することはできる。それが仕事のようなものだから。でもその中身までは説明できない。作家なら多分味わいの内容まで表現できるんだろうけど」

「変なの」と彼女は言った。<sup>11</sup>

彼女が「私」に訊ねたのは、「素敵」で「立派な料理」の中身、すなわち〈味〉である。料理の〈味〉を覚えていないという「私」に彼女は「でもおいしかったんでしょう」と重ねて訊ねる。しかし「私」は「とっってもおいしかった」「記憶」はあるのに、「それがどんな味だったかは思い出せないし、言葉で具体的に説明することもできない」と応えるばかりなのである。

#### 2-4 料理の「中身」としての「味」

「絵描き」である「私」は、料理を「スケッチ」として正確に「再現」してみせる。しかし料理の「再現」は料理の「姿かたちをそのまま再現すること」であり、「中身まで説明できない」。〈味〉を表現するのは「作家」であり、「絵描き」ではないというわけだ。

事実、「絵描き」の「私」は、彼女に料理を「再現」することを振り返って、次のように語っている。

私の頭の中で、さっき自分が口にしていた言葉が繰り返されていた。

うん、絵描きだから、料理の姿かたちをそのまま再現することはできる。それが仕事のようなものだから。でもその中身までは説明できない。

うまく説明のつかない様々なものたちが、この家の中で私をじわじわと捉えようとしていた。屋根裏で見つかった雨田具彦の絵画『騎士団長殺し』、雑木林に口を開けた石室に残されていた奇妙な鈴、騎士団長の姿を借りて私の前に現れるアイデア、そして白いスバル・フォレスターの中年男。またそれに加えて、谷間の向かい側に住む不思議な白髪の人物。免色はどうやらこの私を、彼の頭の中にある何かしらの計画の中に引き込もうとしているようだった。<sup>12</sup>

<sup>11</sup> 前掲注 10、p.436。

<sup>12</sup> 前掲注 10、pp.443-444。

「私」は「絵描きだから、料理の姿かたちをそのまま再現することはできる」という。しかし、この「仕事」は、「その中身までは説明できない」。「私」に降りかかってくる「説明のつかない様々なものたち」もまた「姿かたち」を「再現」することはできても、「その中身までは説明できない」というわけだ。表現を「再現」することと内容を「再現」することは、異なっているのである。

このことは、「作家」村上春樹が、主人公の「絵描き」が彼女に料理を「再現」する姿から、小説を読む意味を読者に説明していることを示しているだろう。料理を正確に「再現」して説明することは、必ずしもその〈味〉を正確に説明することにはならない。小説もまた、ある内容を正確に表現＝「再現」することが、必ずしもその〈味わい〉を正確に伝えるわけではない、ということだ。小説を読むこととは、語られた表現と内容を読者が自ら解釈して意味づけていくことにほかならない。言い換えれば、小説の〈味〉は、読者が吟味しなければ味わうことができないのである。

料理を「再現」することは〈味〉を「説明」することではない。とすれば、文学に描かれた食をいかに味わうことができるのか。「絵描き」にとって「言葉で具体的に説明することもできない」料理。この〈味〉を味わうために、次にもう一人の作家の小説と比べて読んでみたい。小川糸の短編『ポルクの晩餐』である。

## 2-5 料理小説家としての小川糸

「小川糸という作家は、名作と呼ぶに相応しい《料理小説》を、つまり物語が料理という素材に奉仕するのではなくて、料理が物語を物語として成立させる重要な要素となっているような――喩えていうなら新しい『芋粥』や新しい『小僧の神様』のような――作品を書くことができる才能の持ち主である」と喝破したのは、文学研究者の平野芳信である<sup>13</sup>。料理を素材に物語を生み出すのではなく、料理が物語を生み出す素材だという「料理小説」。それは小説で料理の〈味〉を説明するのではなく、料理で小説の〈味〉を説明する新たな文学の可能性を示唆している。その意味で、「料理小説」の作家小川の短編は、村上の長編で語られた料理を「再現」する意味を掘り下げて考えるための比較対象にふさわしい。

『ポルクの晩餐』は、小川にとって初の短編集『あつあつを召し上がれ』に収められている。この短編集は、旅行雑誌『旅』（新潮社）に連載された後、『季節はずれのきりたんぽ』を新たに加え、2011年に刊行された。小川にインタビューしたライターの津田ジュンによれば、『ポルクの晩餐』は「今回の収録作品の中で、ひとつだけ異色なストーリー」である。津田に「ある男性が愛人の「男性」を「豚」になぞらえて (!?)、一緒にパリを訪れる「ポルクの晩餐」。どう解釈したらいいのか、戸惑う読者も多いと思いますが（笑）、あ

<sup>13</sup> 平野芳信『食べる日本近現代文学史』光文社、2013年、p.32。

れはどこから発想した話なのですか」と訊ねられ、小川は、次のように応えている。

まずパリを舞台に話を書きたいという気持ちがありました。実は私にはパンクな部分があって(笑)、型にはまった予定調和的なものは崩したくなるんですよ。それでおしゃれなパリの街に、あえて逆のイメージの豚を組み合わせて話を書いてみたんです。他の作品を書いた時は、他社の担当編集者から「良かったですよ」などの感想を頂くんですが、この作品を読んでもらった際は、シーンとして誰も何も言ってくれなくて... (笑)。でも短編集の中に、一編ぐらいそういう少し枠をはみ出したような話が入っていた方が、私としては変化があって面白いのではと思っています。<sup>14</sup>

「おしゃれなパリの街」と「豚」を組み合わせることで、「型にはまった予定調和」をくずす試み。小川は、「少し枠をはみ出したような話」が短編集にもたらす「変化」を語る。「料理小説」としての『ポルクの晚餐』には、どのような「変化」があるのか。またその「変化」を読者はどのように味わうことができるのか。

## 2-6 「料理小説」としての『ポルクの晚餐』

小説のあらすじをまとめよう。主人公は「高層マンションの一室で、豚を飼って暮らしている」「俺」である<sup>15</sup>。フランス語で「豚肉」を意味する「ポルクは男で、俺の愛人だ」という。妻子と別れた理由は定かではないが、「この世界で生きていく術がなくなった」ために「心中」を考える。「どうせなら、思いっきりロマンティックに死なせてよ」というポルクの求めに応じて、「俺」は生まれ故郷のパリで死のうと思いつきフランスへ旅立つ、という物語である。

あらすじをまとめることでわかるのは、小説がパリで「心中」するまでの二人の姿を描いていることである。言い換えれば、小説には二人の「心中」が描かれていない。そこで「心中」するまでの二人が何をしたのかに着目したい。それは、食べることである。

## 2-7 『ポルクの晚餐』における食べること

小説における食の描写をまとめれば、次のようになる。

一週間後、俺はポルクを連れてパリ行きの飛行機に乗った。いよいよ、パリ心中が現実味をおびてきた。さほど美味くもない機内食を、ポルクはむさぼるように食べていた。そして、すぐに寝入った。比喻ではなく、ポルクの人生は、本当に、寝るか食うかのど

<sup>14</sup> 津田ジュン、小川糸「著者との60分」、[www1.e-hon.ne.jp/content/sp\\_0031\\_i2\\_201112.html](http://www1.e-hon.ne.jp/content/sp_0031_i2_201112.html)、2025年1月17日閲覧。

<sup>15</sup> 小川洋子『あつあつを召し上がれ』新潮社、2014年、p.109。

ちらかだ。<sup>16</sup>

日本からフランスはパリに向かった二人が食べたのは、「機内食」である。「俺」にとっては「さほど美味くもない」この「機内食」を「ポルク」はむさぼるように食べる。着目したいのは、「機内食」が何であったのかが描かれていないことである。小説では、「機内食」の味は「さほど美味くもない」という一点だけが強調されている。

だから、飛行機が到着してすぐに、「俺」は「知り合いのやっているレストラン」にポルクを連れて行くことにする<sup>17</sup>。「レストラン」の料理は、「機内食」とは逆に、何であったのかが事細かに説明されているのだ。

レストランでの食事は、ブロッコリーのポターージュで開幕した。

小さな器の表面を、森を凝縮したようなブロッコリーの細かい花が覆いつくしている。案の定、ポルクのお気に召したらしい。

「最後の食事としては、申し分ない内容だろ」<sup>18</sup>

「レストラン」の料理のはじまりは、「ブロッコリーのポターージュ」である。「機内食」もむさぼるように食べていたポルクだが、料理は「案の定、ポルクのお気に召したらしい」と「俺」は誇らしい様子だ。「最後の食事としては、申し分ない内容だろ」という言葉には、「機内食」が「さほど美味くもない」のに対して、「レストラン」の料理がパリにふさわしい「内容」であることが示されている。

## 2-8 食べることと生きること

「レストラン」での料理が終盤にさしかかり、メインが供される次の場面に着目しよう。

メインの肉料理は、子豚のロースの蒸し焼きと、羊の鞍下肉のローストだ。どちらも、爽やかな草原の味がする。目の前でポルクが、共食いをするように、肉にかぶりついていた。

「ポルク、お前が絶対にできない死に方が、ひとつだけある」

「何かしら？」

「餓死に決まってるだろう。それだけは、絶対に無理だな。ポルクが、極度の空腹に耐えられるとは思えない」<sup>19</sup>

---

<sup>16</sup> 前掲注 15、p.110。

<sup>17</sup> 前掲注 15、pp.111-112。

<sup>18</sup> 前掲注 15、p.113。

<sup>19</sup> 前掲注 15、pp.115-116。

「爽やかな草原の味がする」と評されるのは、「子豚のロースの蒸し焼きと、羊の鞍下肉のロースト」である。ポルクが先に食べたのは、「子豚」だろう。「共食い」するようにかぶりついているからだ。ポルクが「レストラン」で事細かに説明される料理にかぶりつく様子を見て、「俺」は告げる。「ポルク、お前が絶対にできない死に方が、ひとつだけある」と。それは「餓死」である。「空腹」で死ぬこととは、食がまさに生き死にと関わる問題であることを言い当てている。食べないことは死ぬことであり、食べることは生きることなのである。

## 2-9 空腹の「味」

「レストラン」での料理の後、一日3食が基本のポルクが食べないことを試みる。パリでの心中に向け、「俺」が「絶対に無理だ」と語った「餓死」で応えようとするのだ。すると、ホテルに向かうタクシーで事件が起きる。「ぎゅるるるるるるるるう」と、車内に「ポルクの腹が鳴った音」が響くのである。

「ぎゅるるるるるるるるう」

車内に、奇妙な音が鳴り響いた。咄嗟に、タクシーが何かを轢いたのかと思った。それくらい大きな音だった。けれどそれは、ポルクの腹が鳴った音だった。

「私ったらもう、こんな時に。お黙りっ！」

ポルクは、自分の腹に向かって叱責した。

「大丈夫か」

「平気よ、このくらい。心配しないで」

ポルクがそういった時、また奇妙な音が響く。けれど、今度は俺の腹からだ。そしてその音を自分の耳で聞いたとたん、急に空腹の固まりがどっと壁のように押し寄せて、俺を羽交い締めにして動けなくした。変な言い方だが、このままでは死ぬこともままならない。

「ジュヴデッサンドル、ラ!」<sup>20</sup>

着目したいのは、「ポルクの腹が鳴った音」に続く、もう一つの「奇妙な音」である。それは「俺」の腹から鳴り響く同じく音と、その音に続いて「俺」が発する言葉である。ポルクが「私ったらもう、こんな時に。お黙りっ！」と自分の腹を叱責するのに対し、「俺」は「ジュヴデッサンドル、ラ!」と大声で叫ぶのだ。故郷がパリという「俺」は自分の「空腹」に対し、フランス語で何事かを語ったのである。

このカタカナで置き換えられたフランス語は“Je veux descendre là!”で、「ここで、私は降

<sup>20</sup> 前掲注 15、pp.120-121。

ります！」という意味である。しかし、先の「ぎゅるるるるるるるるう」を踏まえれば、仮に読者がこのフランス語の意味がわからなかったとしても、「俺」が叫んだ意味は伝わっているのではないか。「俺」のフランス語は、「俺」の「腹の鳴った音」と同じ意味を表していると考えられるからだ。

どういうことか。「ぎゅるるるるるるるるう」という音に意味はない。ただ空腹を表すだけだ。同じく、「俺」のフランス語にも「変な言い方だが、このままでは死ぬこともままならない」「俺」の腹の中で感じた思いが示されている。

音はあるが意味のわからない空腹の味とでも呼ぶほかない表現。カタカナで置き換えられたフランス語の音の連なりには、「ぎゅるるるるるるるるう」と同じく対応する意味がわからなくても感じられる意味が込められている。文学に描かれた食は、現実には食べることができない。しかし、文学は、食べることのできない、たとえば空腹のようなリアルな身体感覚を読者に届ける。ここに文学に描かれた食の味わい方を見出すことができる。

## 2-10 ポトフの翻訳

この空腹が共鳴する場面が続いて、2人は別のレストランで「ポトフ」を食べる。本文には「pot-au-feu」とあり、先のカタカナで置き換えられた音の連なりと異なり、フランス語がアルファベット表記で書かれている。ただし、分かち書きにして単語の意味を読者に意識させて読ませている。

このフランス語をあえて訳せば、「炎の-中の-ポット」となるだろう。ポトフとは、単に洋食のスープを意味するだけでなく、火鍋とでも置き換えるほかない味わいを持った料理であることが表現されているのである。2人が食べる火鍋は、次のように語られている。

「うわあ、これを全部ひとりで食べるの？」

「大丈夫だ、ポトフなら食べられる」

ポトフは、生粋のパリジェンヌだった祖母の得意料理だった。俺は唯一、親族の中でこの人物とは心を通わせることができた。サンジェルマンで趣味の良い画廊を営んでいたが、今はもういない。

人参や玉ねぎ、根セロリや大根、じゃが芋が、どれもほろほろになるまで煮込まれている。肉にも、ブイヨンがたっぷりとしみ込んでいた。これはうまい。絶品だ。ビストロで、こんなにうまいポトフには滅多にありつけない。

「ここにご飯入れて、お茶漬けみたいにして食べられたら最高なのにね」

俺も、たった今、同じことを考えていた。<sup>21</sup>

---

<sup>21</sup> 前掲注 15、p.122。



しかし、最期くらいは一緒に美味しいものを食べてロマンティックに死にましようという言葉が、2人を死から遠ざけていく。食べて死ぬことはできるか。『ポルクの晩餐』が読者に問いかけるのは、日々の生活に欠かすことができない食べることの意味である。『ポルクの晩餐』では、最後の晩餐ならぬ「俺」と「ポルク」が死ぬ前に食べたいとする最後の料理が描かれている。このことは「ポルク」と「俺」が人生で最後に食べたい料理を通じて、食べることで生きることと結びつく意味を読者に示しているといえよう。

一方、『騎士団長殺し』で描かれるのは、謎の男免色が夕食会で用意した豪華な料理だった。村上は、「絵描き」である主人公を通じて料理の「姿かたち」が味を説明することにはならないとして、小説を読むことの意味を読者に問うたのだった。

文学に描かれる食は、現実には食べることができない。しかし、味わうことはできる。『ポルクの晩餐』で「俺」と「ポルク」が「マカロン」を食べた後、どうなったのかはわからない。最後の晩餐は、2人が心中したという意味で最後なのではなく、心中するのを辞めたという意味で最後の料理だったのかもしれない。食べることは、生きることだからである。

## 2-12 多和田葉子「Hamlet No See」における食

次に、小説とは異なるジャンルである詩に詠まれた食と〈食べものがたり〉を比べてみたい。取り上げるのは、多和田葉子「Hamlet No See」である。タイトルが示すように、この詩はシェイクスピアの戯曲『ハムレット』をもとにしている。しかし、「ハムレットの詩」は「ハムレットの死」でもあり、「ハムレットの詩が見ていないもの」でもある。

飛べ、飛べ、とんび、飛べ、とんび、飛び、  
飛ぶべきか、飛ばないべきか、  
To be, それとも or  
not to be:  
それは問題か、  
喰え、と言われても、喰えない、  
それが問題、que・stion,  
フクシマのマッシュルーム、と書いてある  
喰え・たら喰ってあげたい、  
召し上がってくれよ、  
たべる な、ない、ないん、ないんだ  
喰え、喰え、クエスチョン、  
食べられるのか、  
フクシマのトマト、フクシマのキャベツ、フクシマの大根、

です、と書いてある やおやのマジックペンで

喰え、喰えず、クエスチョン、

that is the question: Whether 安全か危険か

危険だけど健康 いいえ 安全だけど病気にはなる

調べたから安全です、数字でかく安全、目の中の血管の赤信号、ぴかっぴかっ、意識の中に in the mind 含まれた苦悩、suffer シェイクスピアが途切れ途切れに聞こえてくる、海の向こうから、汚れた海の向こうから。なぜ海を敵にまわすのか、死を海に垂れ流す、死ぬのは、死なないのは、死、against a sea of troubles, フクシマの To die: to sleep; No more; and by a sleep to say we end 海の言語が分からない、もう息ができないと言っているのか、それともまだ還元できると言っているのか、海と話をすることができたなら、and the thousand 千代に八千代にこれから苦しむ natural shocks 自然には還元されないショック 耳をすまして、聞き取れる言語だけでも、波の間から集めて、書き留めて、To die, to sleep 眠らないで、喰え、喰え、クエスチョン・オブ、死、死、シェイクスピア。<sup>23</sup>

詩の冒頭で多和田は、問う。「To be, それとも or/not to be:/それは問題か、/喰え、と言われても、喰えない、/それが問題、que・stion」と。戯曲『ハムレット』において語られる「To be, or not to be」が、日本語で「飛べ」と置き換えられている。この置き換えによって「とんび」という鳥が生まれるのだ。「飛べ」と言われて鳥が飛ぶべきか飛ばないべきかを考えないように、人もまた「喰え」と言われて食べるべきか食べないべきかを考えない。

しかし、「喰え」と言われても食べることができない状況が作られていることが「que・stion」なのだ。多和田は、この状況を「フクシマ」と名付け、「マッシュルーム」、「トマト」、「キャベツ」、「大根」とさまざまな野菜の名前を挙げていく。「危険だけど健康 いいえ 安全だけど病気にはなる/調べたから安全です、数字でかく安全、目の中の血管の赤信号」という言葉には、不安を抱える私的な想いと安全と謳われた公的な文句が並べられている。「安全か危険か」が問題なのだ。それは、ハムレットが見なかった問題でもある。しかし海を越えてハムレットが語った問題でもある。

## 2-13 詩の翻訳

タイトルに含まれた「see」は、日本語の音では“sea”＝「海」と重なる。「ハムレット」のセリフを意味から翻訳すれば、絶対に結びつくことのない「見る」と「海」が音では置き換えることが可能になるのだ。「海の言語が分からない、もう息ができないと言っているのか、それともまだ還元できると言っているのか、海と話をすることができたなら」とい

<sup>23</sup> 多和田葉子「Hamlet No See」、www.lyrikline.org/en/poems/hamlet-no-see-13807、2025年1月17日閲覧。

う言葉には、先の小川の小説における腹の鳴る音と同じ問題が重なるだろう。「ハムレット」が見なかったこと、しかし、海を越えて「ハムレット」が語ることを、日本語と英語の間で意味を超えて置き換えれば、「ハムレット」の「死」は、「詩」として意味を持つことになる。

「喰え」という問題を「ハムレット」は、語らなかった。しかし、「ハムレット」のセリフは、死ぬのか死なないのかという問題を現代の読者に別の形で語る。「ハムレット」が「フクシマ」とつながるのは、まさに食べることで生き死にに関わっているからである。

## 2-14 『フランドン農学校の豚』における食べられるもの

この多和田の詩と比べて読んだのは、宮沢賢治『フランドン農学校の豚』である。『フランドン農学校の豚』では、食べる側ではなく食べられる側の問題が描かれている。小説の語り手は、フランドン農学校で育てられる豚が屠殺されるまでの過程を読者の「大学生」に「物語」として語る。冒頭部分で豚は生徒が口にする「白金」と「豚」が並べられることを「幸福」に感じる。「白金が、一匁三十円する」のに対し、「自分のからだは二十貫で」、「 $20 \times 1000 \times 30 = 600000$  実に六十万円」になるからだ。

「ところがその幸福もあまり永く続きませんでした」と語られる<sup>24</sup>。それは「たべ物の中から一寸細長い白いもので、さきに剛いみじかい毛を植ゑた、ごく率直に云ふならば、ラクダ印の歯磨楊子」を見たからだ。「たべ物」と「歯磨楊子」の組み合わせには、「たべ物」を誰が食べるのかという問題がある。豚は「歯磨楊子」から自分が食べられる側にいると知ったのである。

食べる側は「たべ物」を味わうことができるが、食べられる側はどのように食べられることを感じるのか。語り手は「豚の心もちをわかるには、豚になって見るより致し方がない」という。たとえば、「最も想像に困難なのは豚が自分の平らなせなかを、棒でどしゃつとやられたときに何と感ずるか」だとして、この困難を表現できるのは「日本語」「伊太利亜語」「独乙語」「英語」といった言語ではなく、「結局は、叫び声以外わからない」と論じている<sup>25</sup>。小説は、豚の最期に至るまでの「心もち」を語るのである。

## 2-15 食べられるものの「心」

この豚の「心もち」は、次のように語られている。

（とにかくあいつら二人はおれにたべものはよこすが、時々まるで北極の、空のやうな顔をしておれのからだをじっと見る。実に何ともたまらない、とりつきばもないやうな

<sup>24</sup> 宮沢賢治『宮沢賢治全集 7』筑摩書房、1985年、p.134。

<sup>25</sup> 前掲注 24、p.135。

きびしいころでおれのことを考へている、そのことは恐い、ああ、恐い。) <sup>26</sup>

豚を感じるのは、自分に向けられた他者の視線である。「あいつら」とされる「教師」と「助手」は「たべもの」をよこすばかりではない。「北極の、空のやうな顔」で自分の体を見るのである。「たべもの」は豚を食べられるようにするために与えられており、二人は豚を「たべもの」として測定している。

食べることは生きることだが、食べられる側の豚にとって食べることは自分が死に向かって方向づけられていることを否応なく知らされるものでもある。だから、次第に「たべもの」を食べなくなる豚には、次のように「たべもの」が与えられていく。

「それでよろしい。ではやろう。」教師はバケツの中のものを、ズック菅の端の漏斗に移して、それから変な螺旋を使ひ食物を豚の胃の中を送る。豚はいくら呑むまいとしても、どうしても咽喉で負けてしまひ、その練ったものが胃の中に、入ってだんだん胃が重くなる。これが強制肥育だった。

豚の気持ちの悪いこと、まるで夢中で一日泣いた。 <sup>27</sup>

「たべもの」が「食物」として豚の胃の中に送り込まれる装置としての「強制肥育」。「たべもの」はもはや食べたいものではなく、「呑むまい」としながら「胃の中に、入ってだんだん胃が重くなる」ものである。食べることは「豚の気持ちの悪いこと」なのだ。

## 2-16 食べられるものにとっての食べること

豚は、最期を迎える前日に「今日はもう餌をやらんでくれ」として「たべもの」が与えられなくなる。体を洗われた豚は感じる。「今朝からまだ何も食べないので、胃ももうからになったらしく、あらしのやうにゴウゴウ鳴った」と<sup>28</sup>。この後、助手によって小刀で喉を割かれ、絶命する。

語り手は、「一体この物語は、あんまり哀れ過ぎるのだ。もうこのあとはやめにしよう」と豚の最期を語る<sup>29</sup>。食べられる側にとっての食べる意味とは、生きることではなく死ぬことへと向かうものなのである。

多和田葉子の詩と比べて読むとき、宮沢賢治の小説は食うことをめぐる問題を読者である私たちに突きつける。「喰え」という問題には、人が「フクシマ」の汚染によって安全か危険かがわからない食べものを食べることとともに、人がそもそも食べられる側の気持ち

---

<sup>26</sup> 前掲注 24、p.136。

<sup>27</sup> 前掲注 24、p.148。

<sup>28</sup> 前掲注 24、p.151。

<sup>29</sup> 異稿では、「風紀上よろしくありませんからあとは詳しく書きません」と豚の最期を語り、八つに分解された豚が「便宜上雪の中に漬けられた」ことが告げられている（前掲注 24、p.425）。

を知ることの意味を考える必要があるということだ。文学に描かれた食を比べて読むことから浮かび上がるのは、食べることが生きることであると同時に、食べることが死ぬことと紐づけられているものの存在を理解する必要がある。

### 3 〈食べものがたり〉でつくる文学教育

#### 3-1 探究と冬期講座における〈食べものがたり〉

最後に、文学に描かれた食の意味を味わうために行った二つの授業について説明したい。

一つは、高校2年生における探究で、11月に4回行った50分一コマの授業である。本務校では、高2で一時間、高3で二時間それぞれ探究の時間を設け、課題の設定、情報の収集、情報の整理・分析、まとめ・表現というプロセスを学んでいる。大きな枠組みとして言えば、高2がグループで研究の概要を発表し、高3が個人で研究の成果をまとめることとしている。

グループで問いをつくるために11月に行ったのは、学年の教員が2名ずつペアになり、「平和」「福祉」「教育」「環境」「食とスポーツ」「言葉」のように6つのテーマに分けて展開する授業である<sup>30</sup>。担当したのは「言葉」で、〈食べものがたり〉を読む、書く、訳すとして、短編小説の読解、小説の続きの創作、英語の原文のリレー翻訳を試みた。

もう一つは、冬期特別講座で「〈食べものがたり〉の学び方」として希望生徒27名を対象に、12月に行った100分一コマの授業である。講座では、小説を読むことに加え、パンを実際に調理し、言葉だけでなく香りや匂いの成分について考えるために、国語、化学、生活文化の3名の教員で取り組んだ。

この二つの授業から、学習者が〈食べものがたり〉を通じて社会をつくる意識を育むことを目指した。

#### 3-2 探究における読むこと

〈食べものがたり〉を読むことから取り上げよう。授業で扱ったのは、アメリカの小説家レイモンド・カーヴァー『風呂』（1981年）である。

小説の内容を十分に理解したかを確認するために、教員側であらすじをまとめ、（ ）に本文で使われた言葉を入れる課題をつくった。国語科の教員には、おなじみの要約である。

（ ）に言葉を入れた要約は、下記の通りである。

母が子供の（1 バースデイ・ケーキ）を買いにショッピング・センターにいくと、（2 パン）屋の主人の態度は（3 つっけんどん）だった。誕生日を迎える少年は友達と歩いていたら（4 車）にひかれ、家に帰ってきたものの意識を失ってしまう。両親は（5

<sup>30</sup> 生徒にはアンケートであらかじめ希望をとり、テーマごとの人数が均等になるように調整し、各テーマの人数を35～38名、つまり通常の教室に収まる人数とした。

病院)で子供が目を覚ますのを待つが、父は家に帰って風呂に入ることにする。すると、何度も謎の(6電話)がかかってくる。「(7ケーキ)ですよ」と。

病院で医者の方ランシス先生からは「(8昏睡)」ではないと説明されるが、母は納得できず、少年が目を覚ますまでつき添おうとする。しかし父からいったん家に帰って(9風呂)に入って少し体を休めるように説得されて、家に戻ることにした。すると、そこへまた電話が鳴り、「(10スコッティー)のことですよ」と言うのだった。

要約を煎じ詰めれば、誕生日に交通事故に遭った少年を看病する夫婦に不審な電話がかかってくる物語とまとめられる。

### 3-3 〈食べものがたり〉の視点から読むこと

国語の授業で行われるこの要約課題に対して、〈食べものがたり〉の視点から読み解くとうなるだろうか。

カーヴァーの短編について、次の二つの質問を投げかけた。一つが「小説にはどんな「食べるもの」が描かれていますか？」で、もう一つが「小説でどのように「食べること」が描かれていますか？」である。

一つ目の質問から確認したい。カーヴァーの短編から「食べるもの」を拾うと、誕生日の「チョコレート・ケーキ」、誕生日の少年が手にしていた「ポテトチップ」、父親の飲む「ウイスキー」、事故に遭った少年が摂取する「ブドウ糖」、母親の口にする「何も食べてはいません」、ペットの「犬」の「餌」、帰宅した夫婦が飲む「コーヒー」に「お茶」といった具合である。「食べるもの」に目を向けると、小説が次第に豊かな食から遠ざかっていくことがわかる。

この一つ目の質問を踏まえつつ、二つ目の質問では「食べること」に着目して、小説を読みなおした。学習者によれば、短編は「誕生日の「ケーキ」が交通事故のために、食べられなくなる」、「父は「ウイスキー」、母は「お茶」しか飲めず、犬のみ食事する」、「「ポテトチップ」を食べていた少年が事故で「チューブ」につながれてしまう」物語である。つまり、いわゆる要約と異なり、食に着目してまとめると、学習者が登場人物の食べ方を柱にそれぞれの表現でまとめていることがわかる。

### 3-4 探究における書くこと

次に、〈食べものがたり〉を書くことを取り上げたい。三つ目の質問では、『風呂』は、実は、編集者がもとの小説を書きかえてしまった話です。後に、小説家は、自分が作ったもとの形に戻します。この小説の続きはどうなると思いますか？」として、5W1Hを意識して短編の続きを創作した。

下記の引用は、学習者の創作を【ハッピー・エンド】と【バッド・エンド】に分けてま

とめたものである。

#### 【ハッピー・エンド】

何度もかかってくる電話に母が怒りをぶつけると、父から息子が回復したと電話がくる。ケーキを取りに行った夫婦が病院でケーキを食べると、息子の目がゆっくり開く。母が風呂に浸かっていると息子が目を覚ましたと電話があり、家族でケーキを食べる。電話の後にパン屋の主人が思い立って病院を訪ね、ケーキを届けると少年の目が開く。母が電話主に息子の事故を告げると、パン屋が回復したらケーキを作り直すと約束する。電話でケーキを思い出した母がパン屋を訪ねると事故を起こしたのは自分だと告げる。

#### 【バッド・エンド】

息子は亡くなり電話は鳴り止まず、夫婦二人がケーキを食べて慰め合う。車にひかれた時母は心を既に病んでいて、父と医者で息子が生きているふりをしていた。

【ハッピー・エンド】から確認すれば、「父から息子が回復したと電話がくる」、ケーキを食べると、息子の目がゆっくり開く、「家族でケーキを食べる」、「ケーキを届けると少年の目が開く」、「パン屋が回復したらケーキを作り直すと約束する」、「事故を起こしたのは自分だと告白する」という物語だった。一方、【バッド・エンド】は、「夫婦二人がケーキを食べて慰め合う」、「父と医者で息子が生きているふりをしていた」というものだ。

いずれも、小説の謎である「電話と事故とケーキ」につながりを見出す方向で創作していることがわかるだろう。〈食べものがたり〉を書くことは、謎のゆくえを食から紐解くことだといえる。

### 3-5 探究における訳すこと

次に、〈食べものがたり〉を訳すことを取り上げたい。

四つ目の質問は、「別紙は、レイモンド・カーヴァーのものの小説の一部です。36名でこの小説の一節を翻訳しながら、どんな小説なのかを考えましょう。」というものである。別紙とは、インターネット上にある Carver の“A Small, Good Thing”の後半部分を抜粋したプリントである<sup>31</sup>。

このプリントを9つのパートに分け、4名一グループで訳し、音読した。この音読から物語の概要をつかむこととしたのである。

例を二つ挙げる。一つは夫婦が電話をかけてきたのがパン屋だと気づき、店にやってくるシーンである。英語原文と学習者訳、そして翻訳者訳を並べ、本発表で着目する箇所を傍線部で示した。なお、カーヴァーの翻訳者は、作家の村上春樹である。高校生 VS 村上

<sup>31</sup> Carver, Raymond. *A Small, Good Thing*. Available at [www.classicshorts.com/stories/sgthing.html](http://www.classicshorts.com/stories/sgthing.html), accessed 1 January 2025.

春樹というわけだ。

【英語原文】

“It's you,” he said./ “It's me,” she said. “Scotty's mother. This is Scotty's father. We'd like to come in.”/ The baker said, “I'm busy now. I have work to do.”/ She had stepped inside the doorway anyway. Howard came in behind her. The baker moved back. “It smells like a bakery in here. Doesn't it smell like a bakery in here, Howard?”

【学習者訳】

あなたねと彼は言った。/私よと彼女は言った。スコッティーの母。これはスコッティーの父。どうぞお入りください。/パン屋は仕事があると行った。でも彼女は玄関に足をふみ入れた。ハワードは彼女の後ろにいて入ってきた。パン屋は後ろに下がった。ここはパン屋のにおいがする。ベーカリーのにおいしない？ハワード？

【翻訳者訳】

「あんたか」と彼は言った。/「私よ」と彼女は言った。「スコッティーの母です。こちらはスコッティーの父親。入っていいかしら？」/パン屋は言った。「あたしは忙しいんだよ。仕事があるんだ」/彼女は構わず中に入った。ハワードはその後から入ってきた。パン屋は後ずさりした。「パン屋の匂いがするわ。ねえハワード、パン屋の匂いがすると思わない？」<sup>32</sup>

“It's you”は、学習者訳では「あなたね」だが、翻訳者訳では「あんたか」である。「彼」がパン屋なので、彼の粗野な性格をにじませている点で、正確なのは村上の方だろう。次の“We'd like to come in”も、村上が「入っていいかしら？」であるのに対し、学習者は「どうぞお入りください」と訳している。学習者訳は、誰が声をかけているのかがやや不明である。

しかしながら、英語原文の“*She had stepped inside the doorway anyway*”の“*anyway*”を村上が「構わず」と訳しているのと同様に、学習者もまた吹き出しを作って「でも」と加えている。前の文で仕事があるというパン屋の言葉に対して、彼女の思い切った行動を際立たせているのだ。

### 3-6 誤訳の学び

もう一つの例は、続く夫婦とパン屋との次のやりとりである。

---

<sup>32</sup> カーヴァー、レイモンド『大聖堂』村上春樹訳、2007年、pp.160-161。

【英語原文】

“I know bakers work at night,” Ann said. “They make phone calls at night, too. You bastard,” she said./ The baker continued to tap the rolling pin against his hand. He glanced at Howard. “Careful, careful,” he said to Howard.

【学習者訳】

「パン屋が夜に働いていることは知っているわ」とアンは言った。「彼らは夜に電話をかけるものね。このくそやろう」彼女は言った。パン屋はロールパンをこねつづけた。彼はHowardを一べつした。「気をつけろ、気をつけろ」と彼はHowardに言った。

【翻訳者訳】

「パン屋が夜中に働くことは知ってるわ」とアンは言った。「そして夜中に電話もかけるのよ。このろくでなし」と彼女は言った。パン屋はのし棒をぴしゃぴしゃと叩きつけていた。彼はちらっとHowardの方を見た。「変な真似はするなよ」と彼はHowardに向かって言った。<sup>33</sup>

学習者の訳から見えてくるのは、パン屋の主人がパン作りに余念なく働き続けていることである。「このくそやろう」とこき下ろされても、ロールパンをこね続け、相手には「気をつけろ」と注意を与えている。

もちろん、英語原文の“the rolling pin”の“pin”は「のし棒」のことで、学習者が“pan”とまちがえて訳したものかもしれない。しかし、彼の手に打ちつけるのし棒は、ロールパンをこねるために使われている。繰り返し告げられる“careful”は、相手に対する警告と取ることもできるが、自分の仕事に対する矜持と読み取ることもできる。

その意味で、〈食べものがたり〉を訳すことは、学習者が異なる言語であってもなぜそのように訳したかを注意深く考えるための作業と意味づけられる。

このリレー翻訳を経て、五つ目の質問では「みんなでリレー翻訳した小説は、どんな話ですか。自分の創作した小説と比べながら、どんな話なのかをまとめましょう。」とした。学習者は、小説を「みょうな電話を受け取」った夫婦が「電話をかけてきたのがパン屋だと気づき、一緒に問い詰めにいく」と、物語の概要を的確につかんだことがわかる。

興味深いのは、学習者が「私が書いた続きより食べるという行為が母親と父親にとってより切実な重要性を持つ」点に目を向けていることである。「電話の謎」を解き明かす「夫婦の行動」に「食べること」が関わっていると読み解いていくところに、学習者が食と物

---

<sup>33</sup> 前掲注 32、pp.162-163。

語の関わりに気づいていったことがわかる。

### 3-7 冬期講座における読書

最後に、冬期講座における〈食べものがたり〉を作ることを取り上げる。参加生徒には、探究の授業と同じくまず読書課題に取り組み、その後にパン作りを行った。そこで、六つ目の質問では「「食べること」を何度も勧められながら食べる気にならなかった母親のアンが、はじめこの人とはとても仲良くなれそうもない」(p.120)と感じたパン屋の主人の焼いたパンを食べたのはなぜだと考えられますか？」と問うた。

学習者が理由に挙げたのは、「パンの心地よい香り」や「焼いたパンを食べること」といった食べるものが関係していることである。おもしろいのは、「自分の心境に似ている部分」や「「ちゃんと食べて頑張って生きていかなきゃ」という心情や言葉に目を向けている点だ。「パン屋の謝罪の心」と「パンのよい匂い」というつながりのない二つの事柄を関係づけているのである。パンを「食べる」という母親の行為は、パン屋の主人の「語る」言葉によってもたらされたのである。

さらに七つ目の質問では「結末部分で「匂いをかいでみてください」とパン屋は夫婦に語る。その後、「二人は食べられる限りパンを食べ」るようになるが (p.167)」、パンの「匂い」はなぜ人をしあわせな気持ちにするのだと考えられますか？」と問うた。学習者は、匂いからしあわせを感じるのが「小さいころから」の習慣、「焼き立ての優しい匂い」、「やさしく包み込んでくれる」、「あたたかい空気と雰囲気」や「明るい光がさしこむように希望」を感じるためだと応えている。興味深いのは、食べるからではなく「食べてなくてもおいしい」からと理由を挙げていることだ。

「食べるもの」の匂いを考えることとは、文学で食を味わうことと重なる。というのも、文学に描かれた食を読むこととは、匂いと同じく、実際には食べていないにもかかわらず、食べることと深く関わる行為だからである。食べものの匂いとは、文学を味わうことそのものだと言える。

### 3-8 冬期講座におけるパン作り

小説を読んだあとに調理実習で作ったのは、パンである。【図と写真】で示したように、通常のパン作りでは「生地をこねる」「一次発酵」「成形」というように、長い時間を必要とする。しかし、100分と時間が限られていたため、冷凍パンを「二次発酵」させ、オーブンで焼くことで「焼成」させた。このパン作りに、りんごジャム、たまごサラダ、ウインナーを焼くことを加え、調理実習に取り組んだ。

この読むことと作ることを経て、最後の問いとしたのが、八つ目の質問の「あなたの目で見つける読みの視点はどのようなものですか？」である。学習者によれば、食には「心を満たす力」があり、「より感情移入」できるようになる、また「パンの匂い」や「香り」は「幸せ」を生み出す。それは「パンを作り食べること」が人の心を変える力を持つということにほかならない。すなわち、一緒に食べることが人と人の心のつながりをつくるのである。

【図と写真】

### 3-9 〈食べものがたり〉を教えること

本授業についてまとめよう。〈食べものがたり〉とは、食を描く文学のことである。授業では、この〈食べものがたり〉を読み、書き、訳し、作ることに取り組んだ。読むことからわかったのは、あらすじや要約を学習者がより具体的に描き出すことができるようになったことである。このことは、ネットの検索やAIで文章を自動生成するのとは異なり、それぞれの視点でことばを表現する機会を学習者にもたらしめた。

書くことから、食というキーワードに着目して抽出した単語を、学習者が物語にして結びつけることができた。訳すことから、前後の文脈を組み立て直し、学習者が母語とは異なる言語に意味を与えることができた。さらに作ることに見出すことができたのは、食と文学の関係である。それは、現実と虚構を関わらせて考えることだといえよう。

〈食べものがたり〉を教えることとは、食べることを通じて人びとの共同をつくる実践にほかならない。食を描く文学から現実の人びとが互いの関係を生み出していくこと。また国語という一つの教科を乗り越えて、他の教科や教員と学び合い教え合うことで、つながりを作り出していくこと。ここに〈食べものがたり〉を教える意義がある。

### おわりに

本研究課題は、湯澤規子氏の名づけた人々が食について語る「食べものがたり」という言葉を用いて、食を描いた文学を題材に本務校における国語教育で学習者が文学を読む手立てを具体化する試みである。食から文学を読む国語教育は、学習者に言葉が単なる情報ではなく、現実の社会とつながりを持つ点に目を向けさせ、自らも他者との関わりから社会を作り出していく担い手であることを意識させる。

食は人が生きる上で欠かすことができないものだ。一方、文学は生きる上であってもい

いが、なくてもいいものであるだろう。文学は読まなくても生きていく上で困ることはないからだ。では、食を描いた文学はどうか。生きる上でなくてはならない食が、生きる上で必ずしもなくてはならないわけではない文学に描かれるとき、人はこの食をいかに味わうことができるだろうか。

本研究はこの問いを柱に、食と文学を題材とした授業を通じて、次の三つの論点について検討した。一つ目は学習者が食の視点から文学を読み解くための国語教育の方法論とは何か、二つ目は国語教育が食の視点を通じていかに文学を教えることができるのか、三つ目は学習者が食を語る言葉をいかに身につけることができるのか、である。この三つの論点から、食について語る「食べものがたり」の中でも、とりわけ食を描いた文学を〈食べものがたり〉として、その意義を明らかにした。

一つ目の論点については、本務校の言語表現法ゼミにおける食と文学をテーマにした授業から、〈食べものがたり〉の教え方を具体化した。村上春樹『パン屋襲撃』と韓国映画『アコースティック』における食と物語の関係、同じく村上の『騎士団長殺し』と小川糸『ポルクの晩餐』における食べることの意味という二つの授業を通じて、〈食べものがたり〉の視点から読む文学の教え方を提起したのである。

二つ目の論点から考察したのは、大学で文学を専門分野として教える研究者や文学と直接的には関わりを持たない他の教科との協働授業のあり方である。理科科と生活文化科の教員と行なった食を描く文学とパン作りを組み合わせた協働授業から見出したのは、文学に描かれた食を味わい文学そのものを味わうとともに、まだ読んだことのない文学を味わう体験そのものをつくる「味読」という方法論である。

三つ目の論点では文学の表現に向かう構えを学習者が身につける〈食べものがたり〉の学び方を構想した。読むこと自体を形作る言葉をいかに学ぶことができるかを考えたのである。そのために行なったのは、古典文学を専門とする研究者による短歌の創作講座、村上文学を専門とする研究者による『バースデイ・ガール』と『夏帆』についての講演、国語教育で学んだ経験を海外で日本語を学ぶ学習者と共にシェアし合う授業である。

これら三つの論点を分析することから明らかになったのは、学習者が食と文学を通じて他者や社会と結びつくきっかけをつかむようになったことである。食の視点から文学と言葉を味わう体験は、学習者が他者と共につくる社会の未来を考える機会をもたらした。

本研究の特色は、教室で文学作品を教えることに加え、他教科の教員との協働授業、国内外の教育者・研究者との共同研究から生まれた zoom での遠隔授業、通常授業のほかに本務校で行われる合同ゼミや特別講座といったさまざまな授業で、従来の国語教育にはないアイデアを具体化した点にある。

最後に、これまで説明してきた授業以外の実践に触れつつ、本研究から見えてきた今後の可能性を示したい。

一つは、津田塾大学で『源氏物語』をはじめとした日本の古典文学を講じる木村朗子氏

との協働授業である。木村氏による授業は、本務校の冬期講座で行われたものだが、共同研究で討議を重ねる中から生まれたものでもある。

討議では、2024年当時、フランスに在住する木村氏から翻訳者で作家の関口涼子氏による『ベイルート 961 時間 (とそれに伴う 321 皿の料理)』(講談社、2022 年) が紹介された。関口氏とレバノンには、はじめからつながりがあったわけではない。しかし、執筆当時、フランスでブームになっていたレバノン料理を導きの糸に、ベイルートへの旅とその最中に起こった中東紛争やコロナ禍を通じて失われつつある街とその記憶が綴られている。

こうした食をめぐる共同研究でのブックトークから、高校生には縁遠く思える古典と彼女ら彼らの現在をつなぐ試みとして「高校生の歌会」が行われた。歌会で読まれたのは、食である。和歌と短歌の違いから歌の発生を紐解きつつ、上の句につながるように付句での作歌が試みられた。この講義と試作を経て高校生の作った短歌は、それぞれ独創性に富むものになった。

また、山口大学の名誉教授である平野芳信氏には、二つの講演を依頼し、「村上春樹『バースデイ・ガール』論——進化するテキスト」、「村上春樹『夏帆』論——砂漠と同じ名前をもつ男」という形で結実した。講演は、食べるではなく料理を供するという新たな料理小説の担い手である村上春樹の文学から、物語を読む基礎となる方法論を学習者が獲得することを目的として行われた。

平野氏によれば、物語を読む具体的な方法論は、宝探しとしての物語、曲者としての語り手、必然としての偶然の三つである。この三つを踏まえ、古典文学や定番教材の知見もちりばめながら、高校生に文学を読む興味と関心を引き出す仕掛けが施された。

前者の『バースデイ・ガール』は、20 歳になった少女の願いごとをめぐる物語である。学習者には彼女の願いごとの中身が何かを予想させつつ、時の経過とともに変化する文学の読みを進化として捉えうることが提起された。後者の『夏帆』は、絵本作家の主人公夏帆がブラインド・デートで出会った年上のハンサムな男性佐原から投げかけられた「侮蔑的な発言」をもとに、新しい絵本を書き上げる物語である。「君みたいな醜い相手は初めてだ」と口にする彼は砂漠と同じ名前を持つ。完璧なようでいてどこか物足りないこの男を AI と見なすことで、平野氏は現代における AI との共生を描く物語と読み解いた。

さらに、研究代表者が近年継続的に行なってきた韓国との交流活動を挙げることができる。この交流活動は、ソウル特別市教育庁が行う「通訳・翻訳プログラムを利用した国際共同授業」を機に、徳成女子高等学校で日本語を教える張日榮氏との間で培われたものである。今年度は、「AI と異文化」「味から学ぶ日本語」「文学のリライト」という 3 つのテーマから授業を展開した。近年、社会でも教育の世界でも議論となっている AI を用いた授業、日本ではあまり行われていない第 2 外国語教育としての韓国語を学ぶ授業、日本の高校生がおすすめの文学作品をリライトして紹介する授業は、いずれも今後の異文化交流を取り入れた国語教育の新たな展開を示すものとなるにちがいない。

またカナダのヒューロン大学で日本語を教えつつ、森のまち日本語学校で校長を務める白川理恵氏と、日本の高校生がカナダで日本語を学ぶ小中学生の「国語の先生」になる講座をつくった。この講座では、日本の高校生が学んできた国語教材で印象に残っている作品をカナダ側の小・中学生に「やさしい日本語」に置き換えて紹介した。日本の高校生には国語を学ぶ意味を捉えなおす機会に、カナダの小・中学生には日本とカナダの言葉をめぐる教育を比較する機会になった。さらに小・中学生を教える保護者にとっても、現在、高校で国語を学ぶ高校生の実態を知る機会になった<sup>34</sup>。

このように、本研究は食から文学を読むという視点から古典、和歌・短歌といった韻文、近現代の小説を扱うとともに、音楽の歌詞やドラマ、映画といった視聴覚資料を取り上げ、時代とメディアをまたぐ領域横断型の国語教育に取り組むものである。付属校という本務校の特性を活かし、他大学の教員を招聘し、高大の連携を図り、さらに、食を通じて韓国で日本語を学ぶ高校生やカナダの土曜学校で日本語を学ぶ小中学生と異文化交流を図る試みは、従来の国語教育にはない視点だろう。これらの実践に加え、理科や生活文化との協働授業にも取り組む点で、これまでの国語教育をさまざまな知識・言語・文化に開かれた教育活動とすることを目指した。

食の視点から文学を読む試みは、言葉がリアルな現実と結びつく実感を学習者に身につけさせる。学習者にとって言葉が単なる情報ではなく、現実の社会とつながりを持ち、自らも他者との関わりから社会を作り出していく担い手であることを意識づける〈食べものがたり〉の教え方。この「食べものがたり」がつくる国語教育に見出すことができるのは、文学を味わうことが社会に参画していく機会を学習者にもたらす教育の未来である。

\* 本研究にご協力いただいたすべてのみなさまに感謝いたします。梅田有希子氏には協働授業における調理実習について貴重な助言をいただきました。「食べものがたり」の文学教育」共同研究会のメンバーには、授業の計画から実践に至るまで多大なご支援を賜りました。特に海外の学習者との交流活動は、白川理恵氏、張日榮氏のご協力なしにはなしえませんでした。平野芳信名誉教授には本研究の計画段階から細やかなご指導を賜り、木村朗子教授にはサバティカル期間にもかかわらず、毎回の討議で刺激的な提言をいただきました。みなさまのご支援に心より感謝申し上げます。

共同研究者  
(代表) 林 圭介  
宮沢真希子

<sup>34</sup> この講座での試みは、「グローバルにつながるオンライン日本語教育シリーズ」として日本語教育学会が主催する「世界中の日本語教育関係者のためのオンライン交流会」(Zoomにて2025年3月22日に開催、[kokusaionline.wixsite.com/2025](https://kokusaionline.wixsite.com/2025)、2025年3月21日閲覧)にて、白川氏とともに「高校生が教える「グローバルな国語」: 国語教育と継承語教育の連携を目指して」と題して発表する。